

語り継ぐことの大切さ

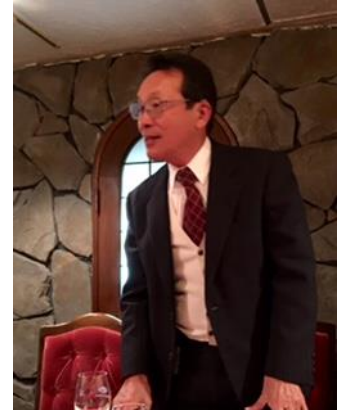
元神戸市職員 松山順三

防災塾・だるまの10年、神奈川大学の荏本先生と先生とともに活動を
支えてこられた

副塾長の池田さんやリーダーの皆さんに大きな拍手を送りたいと思いま
す。

あの阪神淡路大震災は、平成7年1月17日午前5時46分に直下型地
震によって甚大な被害をもたらしました。

当時、私は神戸市職員として連休明けの早朝に遭遇しました。その朝、
区長室に集まった職員は、とりあえず防災マニュアルによって各職場の
役割分担を確認したものの、ライフラインの途絶と情報不足から被害実
態が解らず、出勤しているわずかの職員を手分けして避難所の状況、大火災の発生箇所、家屋の損
壊状況の把握に努めた結果、未曾有の大災害に驚愕しつつ区役所としての救援活動を開始しました。



<避難所> 公立小学校を指定していたが、中学校や高等学校のほか、すべての公共的施設、宗教
施設等に被災者は殺到しました。学校の扉鍵を開けるはずの職員は出勤していないため、区職員
の手によって破壊して回りました。

<救援物資> 当時は小規模災害への対応を想定しており、少数の毛布等を備蓄するのみでした。
区内の生協や大型スーパーから飲料水・食料・毛布・赤ちゃん用品などを確保しようとするもスー
パー等も被災しており、他都市からの救援を待つことにしました。

前述のように、職員の多くも被災した中での救援活動は、他都市やボランティアによる支援がなけ
れば絶対にできないことでした。

この大震災から、後にも次々と派生する大災害から被災者支援の制度が整備され、東日本大震災に
よって一層充実したものに整備されてきましたが、防災・減災の面では不十分と言わざるを得ない
現状です。

地震の備えは、各自が家具の固定と家屋の耐震化で災害の多くを防ぐことが出来ます。

その後にくる津波は高台へとにかく逃げることで命は助かります。でも、このことが既に忘れ
かけています。

“災害は忘れたころにやってくる……” その風
化が怖ろしいのです。

“備えあれば憂いなし”
防災塾・だるまの進化は、これからにかかっています。



2016年3月